

桜物語

-サクラテイルズ-



ようすず



回顧

あの時、桜木の下で結んだ約束は何だっただろうか。
いや、実際に覚えてはいるのだが思い出したくはない。
記憶よりも感情が優先する奇妙な感覚に陥る。

それが満面の笑みだったのか、悲哀の表情だったのか、そこに何も無いような無表情だったのか。

あの時の記憶に霧がかかっているように、それを視る事はできない。
だが今はそれでいい。

どうせ忘れもしない記憶なら—そっと片隅に置いておくしかない。
吹っ切るように一度背伸びをすると、何処へ行くともなく満開の桜の中を歩き出す。

目を覚ますと、すっかり部屋の中は暗くなっていた。

体を起こし数秒間の目覚め心地を堪能した後、記憶を巡らせる。

そうだ。書物を読みあさっていたのだ……。

目の前には確かに、開いたまま伏せられた本が一冊、二冊と、そこにあった。

ハッとする。

—しまった、寝てしまっていた……？

この部屋とは対照的に外からはぼんやりと暖かい光が差し込み、微かに楽器の音色や人の声が聞こえてくる。

……そうか、今日はアオイチの桜祭りだったな。

まだ眠い目をこすりながら、なんとなく外を眺めてみる。

ガラス窓に映るのはきりっとした細めの顔立ちに栗色の長髪、そして青い瞳をもった青年。

それが俺であり「ハヤト」であるという事を認識するのは一瞬の事だった。

これでも武士としてこのアオイチで育てられ、以前は黒月城に仕えていた。

しかし時が経つにつれ、黒月はより優秀な「忍者」を雇うようになる。

立場上、居心地の悪くなった武士たちは次々と黒月城を出て行った。

無論。俺も同様である。

その後は浪人として様々な地を旅し、現在はまた出身地であるアオイチに滞在している。

—どうせ暇なのだし、少し外に出てみようか。

時は夕刻。良い夜桜を見る事ができそうだ。

自宅に居た時には微かだった音が、歩みを進める度に賑やかになってくる。

城下町アオイチの桜祭り。

さすが城下町、と言える程の予想通りの人混みだ。

特に花見や楽器の演奏が行われている広場は混雑している。

こういった人が多いところは、あまり好まないのだが……

—だが、やはりこの桜はいつでも美しい。

この時期の桜を見るのは久しぶりだからか、いつもより輝いて見える。

淡く薄い桃色はそれだけでもその存在を主張しており、

誰もがそれに心惹かれ、奪われ、想い詰まり、一度は足を止める事だろう。

そしてこの混雑の中でやはり、桜を見つめ続ける少女を見つけた。

艶のある濃藍色の長い髪と金色の瞳、白の生地には桜模様をあしらった着物を着た少女。

—それはこの夜桜をそのまま人に映しこんだと言っても良い程の、美しさだった。

しかし少女は立ち止まる事はなく、安定しない足取りでふらふらと歩みを進めている。

ここで余所見をしながら歩いていたら、人にぶつかるのも時間の問題だ。

……というか、きっと邪魔だな。

そう思っていた矢先、既に何人かがその少女を避けて通っているのが見えた。

これはまた面倒なものを見つけてしまったな。

人混みの中で何人の横をすり抜けたかわからないが、

少女が目の前の大男と接触する前に、彼女の横に移動し腕を引いた。

「・・・え？」

「そんなに余所見をしていると、邪魔になるだけなのだが」

少女はハッと前に振り返ると、接近していた大男が通り過ぎるのが見えたらしい。

「・・・あ、すいません・・・」

やっと自分の状況に気付いたか。

「ここは広場の近くだ。他所より混雑しているから気をつけるといい」

そっと注意を促すと、少女はポツリと呟いた。

「私、桜をずっと眺めていたらこんな所まで...」

「ん・・・お主、ここの桜が好きか？」

「あ、はい！毎年この時期は外に出て桜を見るんです」

ぱっと表情が明るくなる少女。

地元の間人ではなさそうだな。

それに、ここの桜が好きだと言う・・・ならば。

外に出たは良いものの、何もする事が無かったから丁度良い。

「なら、これも何かの縁だ。少し花見にでも付き合ってくれ」

「え？あの、ちょっと！」

後ろで何か言っているのが聞こえた気がするが、構わず彼女の腕を掴み進んでいく。

とりあえずこの人混みは避けよう。目が回りそうだ。

歩を進めるうちに、色々な話をした。

無理矢理連れてきた事を詫びたり、自己紹介だったり、これから行く場所の事だったり。

この少女はハルナという。どうやら地元の間人らしいが、俺は一度も見た事は無かった。

アオイチの間人でありながら、珍しそうに桜を見つめているのにも違和感があったが

そんな事は気にせず、今はただ目的地に向かって歩くのみだった。

「お前がここに来るってこたあ、俺と手合わせがしたくなかったのか？それとも、俺が恋しくなったのか？」

「残念ながらどちらでもない。久しいな」

体格の良い角張った顔に茶色のツンツンした髪、そして赤い鉢巻。

祭りだというのにいつもの道着を着て、シゲオは出迎えてくれた。

「お前も帰ってきていたなら挨拶くらいしたらどうなんだ？」

あれからしばらく歩いているうちに、一つの道場に辿り着いた。

今となってはアオイチで唯一の道場と、唯一の武道家、シゲオ。

こいつとは幼少時代からの付き合いで、いわゆる幼馴染である。

「旅中にあまり旨い酒が手に入らなかったもんでな」

割と相手をするのが面倒だった事を隠しつつ、誤魔化してみる。

「いや、それは残念だが、理由にはならねえな」

ダメか。

「この通りだ。それより“いつもの上”いいか？」

目配せで合図をする。

「ああ、もちろん。既に開けてあるぜ」

「感謝する。今日は連れもいるのでな」

「ほう？」

シゲオは初めてあたりを見回すと、俺の後ろにいた少女を見つけた。

「アオイチ唯一の道場へようこそ。俺はシゲオだ」

「あ・・・こんばんわ。私はハルナと申します」

少女は深々と頭を下げる。

「まあ、立ち話もこのくらいにして、そろそろ行ったらどうだ？」

シゲオは親指で道場の中を指す。

「俺はまだ道場の仕事が残っているからな。ゆっくりするといい」

と、シゲオは言い残し先に道場の中へ入っていった。

次に話しかけてきたのは、一連の様子を不思議そうに伺っていたハルナだった。

「あの、お花見をするのはこの道場なんですか？」

「そうだ。まずお主には、今からここで奥義会得のための修行をしてもらう」

「ええ！？」

良い反応をしてくれる。

「奥義の名はな、千変万化・・・」

思考が止まった。又は、脳が思考を拒否している。

そうだな・・・確か面倒に長い名前だったはず。

ハルナは何も言わず、じっと続きを聞こうとしている。

「・・・なんだったかな。まあいいか、中に入れてもらおう」

「・・・ふふ」

俺が何事もなかったかのように先を歩くと、ハルナも後を着いてきた。

二階への階段は入り口の正面にあるため、移動は楽だった。

そして二階の天井には、一部分だけ暗闇から切り取られた場所があった。

そこから溢れる光が、その真下にある、空へと続く梯子の存在を明らかにする。

「——！！！」

今のハルナの感情は驚嘆や歓喜で溢れているに違いない。

なぜなら、以前から訪れている俺でさえ、やはり今も口を閉じる事ができないからだ。

道場の屋根の上。

アオイチを一望できるここから見える景色は、

言うまでもなく桃色の絨毯が広がっているようだった。

「あ…ハヤトさん」

「何だ？」

我に返ったようにハルナが落ち着いた声で聞いてくる。

「ずっと向こうの…あの大きい桜の木は何でしょうか？」

ハルナの指差した方向を見ると、確かに一本だけ抜きん出た桜木がある。

「あれは桜木の湖の奥にある千年桜だ。本当に千年あるのかは知らないが」

アオイチの桜もそうだったが、やはり通常よりも輝いて見える。

「桜木の湖に…一度は近くで見てみたいですね」

桜木の湖にはエリアスとの交易のために人口的に木造の橋がかけられている。

このおかげで、昔の商人は湖の美しい桜を見ながら

のんびりとアオイチまでの旅路を楽しむ事ができたそうだ。

「今の桜木の湖にはモンスターがうろついているからな。一人で行くのはやめておけ」

「そうですか…残念です」

「まあ、この景色で満足してもらえたなら、俺も連れてきた甲斐があるというものだ」

「ええ、とても素敵な眺めですね」

恐らく、会ってから一番の満面の笑みだった。

ひとしきり談笑していると、ハルナがはっとしたように切り出した。

「そろそろお家に帰らないと」

「そうか。帰宅は早いのだな」

まあ、少女を夜更けまで外に出しておく親もいないだろうが。

「はは…実は生まれつき病弱で、あまり外に出してもらえないんです」

少し寂しそうな顔をして言う。

「そうだったか…」

桜を珍しそうに眺めていたのは、これか。

「あ、でも今日は体調が良かったので外に出してもらえたんですよ」

表情がパッと変わり、今度は明るくなる。

「おかげでこんな素敵な経験ができましたし、それに…」

続きを言いかけて、一度呼吸を置く。

「それに、ハヤトさんに会えて…良かったです。またここに連れてきてくださいね」

瞬間、自分の中の何かを動かされた気がした。

「桜祭りはしばらく開催されているからな。また花見をしよう」

「はい！では…」

「送っていこう」

シゲオに挨拶をし、ハルナを見送った後も、心臓はいつも以上に異常な鼓動をあげている。

この浪人の身には、もう経験する事もないだろうと思っていたのに…。

—それは桜のように薄く、儚く、上品なもの。

そうか・・・これが。

気付けば夜が明けていた。

目を覚まし、昨日の事をぼんやりと思い出す。

それから足は、自然と身体を外へと運んでいた。

しばらく町を歩いたが、晴天の下、桜はいつもと変わらずそこに在った。

ただ一つ違うのは。

—誰かに見られている気配だ。

辺りを見回してみるが、人の姿は見当たらない。

「黒影か？」

一人呟くように声をかけてみると、返答は下から聞こえてくる。

そう。俺の「影」からだ。

「御意」

黒影とは黒月城に仕える忍者であり、その内の黒の部隊の名だ。

影の間を自在に行き来できるため、隠密行動を得意としている。

「浪人である拙者の身に何か用かな？」

最も、あの姫がただの伝達役ではなく黒影を出す程だ。何かがあるには違いない。

ちなみに拙者という一人称は普段は使わない。

「ハヤト殿。黒月姫様が城にてお待ちになっております」

姿を現す事はないが、自身の影からは淡々と声が発せられる。

「要件は後ほど城で。との事」

「・・・わかった。今すぐ向かおう」

やはり只事ではないようだ。

俺はこのまま、黒月城に向かって歩いた。

黒月から身を引いて以来、黒月城には出入りしていない。

はるか昔遺跡だったというこの場所にそのまま城を構えたために、

城内は迷路のように複雑になっているらしい。

まあそれも長く仕えている者なら、黒月姫が居る十六夜の間へ辿り着く事はできる。

十六夜の間へ続く扉の前で足を止めると、ずっと横に人の影が現れた。

「お待ちしておりました。久しゅうございますな、ハヤト殿」

「月影か。久しいな」

黒月姫の側近の一人、月影。

まだ武士が仕えていた頃から居る忍者であり、俺でも多少の面識はある。

「姫様はこの先でお待ちしておりますので、ご案内致しますぞ」

そう言って月影が何か呟き扉に手を添えると、それが開き始めた。

月影を先頭に中に入る。

内心は驚いていた。忍術によって開かれる扉か。

この存在を知らなかった俺一人では、姫の元へは辿り着けなかっただろうな。

長い長い廊下を歩き、いくつもの部屋の前を通り過ぎる。

そのうち一つの立派な戸の前で月影の足が止まった。

「では、どうぞ中へ」

―待てよ、この位置は確か「黒月姫の部屋」では。

俺は「客間」に迎えられる予定だったはず…

月影が戸に手をかけた瞬間、嫌な予感が一瞬で身体を巡った。

「待て月影、ここはもしかして―」

遅かった。

中には妖艶な長い黒髪に、それに劣らぬ黒い瞳を持つ少女が、いた。

その少女―黒月姫は、正装に着替えようとしていたのか、自身の着物の帯に手をかけているところだった。

「・・・」

突然の出来事に声も出なかったのか、こちらを見たまま固まっている。

「・・・・・・・・」

当然こちらでも、月影が冷や汗をかきながら固まっている。

「・・・・・・・・・・」

しばしの沈黙。

「・・・間違えたでござる？」

「いや、拙者に聞くな。というか明らかだ」

なぜか突っ込みを入れていると、ようやく事態が把握できた黒月姫の口が開かれる。

「馬鹿者！ここはわらわの寝室じゃああ！！」

「申し訳ないい！」

言うが早いか、月影は戸をピシャリと締め逃げるように歩き出す。

まだ部屋からは騒がしく声が聞こえていたが、面倒事には巻き込まれたくない。

月影の後を追いつつ、今度こそ客間の戸の前に辿り着いた。

「間違いなく、こちらでござる」

客間は二十畳程の広さで畳が敷き詰められた和室になっており、中央には長机と座布団が置かれている。

しばらくすると、黒月姫が客間に入ってきた。

先程の事件など無かったかのように、既に姫の威厳を取り戻している。

「先程は失礼したな、ハヤト」

俺が座っていた場所と机を挟んで反対側に黒月姫も座った。

「とんでもない。まあ、月影は相変わらずのようだがな」

ただ、もうちょっと戸を開けるのが遅ければと考えてしまうのが男の性(さが)である。

「お主、今失礼な事を考えなかったか？」

ぎくっ。

「と、ところで、拙者をここに呼びつけたという事は余程の事情があると見受けるが」

黒月姫はコホン、と一つ咳払いを入れる。

「その通りじゃ。言ってしまうえば、アオイチが今、危機的状況にある。」

覚悟はしていたが、都市単位とは事が大きいな。

「具体的にはどういう事なのだ？」

「お主も気付いたであろうが、桜に異変が起きているのじゃ」

祭りの時に散々見かけた桜。確かに普段より輝いていたのを思い出す。

「気にはなっていたが、やはりあの異様な輝き方は・・・」

「そう。あれは妖力。あの異様に輝いておるのは、桜が町の光を吸収しているためじゃ」

光。光とは、生活に使用する電気から成るものの事だろうか？

—大きく開かれた窓の方を見ると、外は変わらず快晴である事がわかる。

否。

「桜がアオイチ中の光・・・それは陽光も同じじゃが、それを全て飲み込んでしまえば」

「・・・この町に、朝は訪れなくなる」

そうになってしまえば、アオイチでの生活は元より都市としての機能さえ失ってしまう。

「そして、わらわはその妖力の源が・・・玄武だと踏んでおる」

「玄武だと？」

「というのも、アルカディアに一番近い桜木の湖の桜に最も妖力が宿っているのじゃ」

桜木の湖の向こう側には、自然に溢れた豊かな土地がある。

生い茂る草木、澄んだ空気、清らかな水に様々な生き物を抱える理想郷、アルカディア。

そこはかつて、現在の環境が考えられない程の荒廃した土地だったらしい。

しかしそこに玄武が現れた際、途端に土地は自然を取り戻し、玄武はそのアルカディアの奥に今も潜んでいるという話だ。

「玄武の力が桜に影響し、それでアオイチが危機的状況にあると？」

青龍、朱雀、白虎に並ぶ、四聖獣の一角、玄武。

その神の力なら何ができてもおかしくはない、が。

「まあ、わらわも玄武そのものが元凶だとは思っておらん。玄武に何か異変があったのなら・・・」

腕を組み、静かに目を閉じる。

「玄武は既に何者かに支配され、その力を利用しておる」

確かに、この場合そう考えるのが当然であろう。

そしてアオイチにまで妖力を拡散させているとすれば、黒月に敵対する存在が関わっていると考えるのが妥当。

「隼の一族・・・か」

隼とは、古くから黒月一族と対立関係にある一族である。

アオイチに隣接した土地に城を構えており、目的のためなら手段を選ばない集団でもある。

「隼城に偵察に行かせている忍者の報告では、既にその辺り一帯が一日中薄暗いままになっておるらしい」

ならばやはり、この件は隼に何か関係があると見ていいだろう。

「玄武が何らかの力によって支配されているとすれば、もはやどうにもなるまい。

黒月はこのアオイチを守るため、玄武の討伐に踏み切る事にした」

「！！」

なるほど、これで俺が呼ばれた理由もわかった。

黒月はアオイチの勢力を尽くして玄武との全面戦争に挑むというのだ。

「そこでハヤト、この件を受けてお主に依頼したい事がある」

こちらの目をしっかりと捉え話を続ける。

「この玄武討伐に、アオイチのために再度、黒月に力を貸してくれまいか」

黒月には恩もあるし、今は浪人という身の俺であるが、やはり命は惜しい。

「・・・少し考える時間を頂きたい」

「当然だ。半端な心持ちで命を落としてもらっては困るからの」

やはりといった表情で、ニヤリと口元を緩ませる。

「お主の決心がついた時に、また改めて聞こう」

「かたじけない。今日はこれにて失礼する」

一礼して立ち上がり、黒月城の客間を出た。

「当主に仕えたお主の力が、必要なのだ・・・」

客間に一人残った少女は呟いた。

城を後にした俺の心は揺らいでいた。

—桜が見たかった。

元々病弱な私は寝たきりで、精々それを見る事ができても遠目だったり、窓越しだったり。一年に一度の桜祭りは、私にとってこの人生と向きあうための糧となっていた。

先日のそれはもう、素晴らしかった。美しかった。

—また、連れて行ってもらいたいな。

願わくば・・・

あの千年桜も、この目で。

黒月姫から玄武討伐の話を聞いた、その次の日の事。

俺は昼間からシゲオの道場へと足を運んでいた。

「こんな時間から珍しいじゃないか」

訪ねた時には、相変わらず体を鍛えているシゲオの姿があった。

「こんな時間だが、一杯どうだ？」

手に持っていた酒瓶を高く掲げると、シゲオは何かを悟ったように動きを止めた。

「着替えてくるから、上がって待っていてくれ」

道場に上がり小さめの和室に入ると、用意されていた座布団に座った。

酒瓶を中央の丸机に置くと、先程と姿の変わらないシゲオが戻ってきた。

着替えても道着か、こいつは・・・

「さて、昼間から酒を持ってきた珍しい客人の話を聞こうじゃないか」

シゲオも座布団の上に座ると、グラスを置き、早速酒に手を伸ばした。

「昨日の事だが、黒月姫からお呼びがあってな」

「お前はあんな歳下に、というより姫様に手を出しているのか」

「そんなわけないだろう」

わかっているくせに冗談を挟んでくるのだが、それがこいつの長所でもある。

「まあ、それで用件はなんだったんだ？」

「ん。ところで、ここのところ何か桜に異変を感じないか？」

質問に質問で返すのはあまり良くないが。

「・・・そうだな。俺はちょうど先日、桜木の湖に用があって千年桜の前を通ったときに、真っ黒に染まった桜の花卉を見た」

「黒・・・か」

「もう散っているものだったけどな。それに、その近くで幽霊を見た」

「幽霊？」

桜木の湖にモンスターが住み着いているのは知っているが、幽霊の話は未だ聞いた事がない。

「しかも一体じゃなかった。もちろん足は無かったんだが、それを除けば普通の人間と見間違える程ハッキリとしていた」

考えてみれば、通常の桜木と比にならない大きさの千年桜である。

妖力の含蓄量も桁違いなのだから、いずれもその影響なのかもしれない。

「何かおかしいとは思ったんだが、それに関係しているのか？」

それから、俺は黒月姫から聞いた情報の全てをシゲオに話した。

桜の異変、隼一族の関与、—そして玄武の討伐。

「なるほどな。お前がこうして酒を持って訪ねてくるのも頷けるわけだ」

言いながら、くいっと一杯酒を飲む。

「正直、これは俺が想像していた大事をはるかに越えていた」

言ってしまうと、動く山と戦うようなものなのだ。

「そのうちお主のところにも通達が来るだろう」

俺もついでいた酒を一気に飲むと、肝心の質問を投げかけた。

「シゲオ。お主はこの戦いに参加する意志はあるのか？」

「ある」

即答。

こいつは、—こいつは俺と違って、強い。

「故郷を守りたいという気持ちは、お前にもあると思うが」

シゲオは空になったグラスを持て余しながら続ける。

「俺には武道家としての意地と責務がある。ハヤト、お前はもう武士の心は忘れてしまったか？」

「・・・」

しばらく沈黙する。

浪人となり様々な地を旅し、俺は本当に武士の心を捨ててしまったのか。

俺はこの先何も目的とするものも持たず、ただふらふらと過ごすのだろうか。

「姫様は、きっと浪人のお前に依頼をしたわけではないだろう。

当主に仕えていた、武士の心を持ったお前に、この話を持ちかけたんじゃないか」

当主側近の護衛、武士ハヤト。

お主は今、一体どこにいる・・・？

—桜が見たかった。

気付けば自然と、足は桜木の湖に向かっていた。

今日も調子が良い。きっと大丈夫。

恐れていたモンスターは不思議と見かけなかった。

私はそこでは光り輝く桜と湖の景色に見蕩れ、ひたすら見つめ続ける事しかできなかった。

既に散っているであろう、黒く染まった花卉に気づく事なく。

しばらく歩くと、向こう側に大きな桜の木を見つける事ができた。

・・・千年桜。

是非近くでその姿を見てみたい。そう思う気持ちが自然と足を運んでいた。

徐々に近づいていくと、ふと目が視界の隅に何かを捉える。

黒く長い髪に、桜色の着物。一瞬は人かと思ったけれど・・・足が無い。

幽霊？ ハヤトさんは、そんな話はしていなかった筈・・・

と考えているうちに、その幽霊は進行方向をこちらに向け近づいてくる。

このままでは、襲われる・・・！

逃げようとしたが、足が震えて言う事を聞かない。

一定のゆっくりとした速さで、ふわふわと幽霊は近寄ってくる。

もう、ダメだ・・・！

これが夢だと思い込みたいかのように、目を瞑る事しかできなかった。

—沈黙の時間が過ぎる。

恐る恐る目を開けると、目の前に幽霊はいなかった。

辺りを見回してみれば、幽霊はその場を通り過ぎていた。

ホッとする。

足の震えは既に止んでいた。大丈夫、歩ける。

千年桜に辿り着く間にも何体かの幽霊を見たが、一様に私の存在を無視している。

こうして、私は念願の千年桜の前に立つ事ができた。

絢爛、美麗、神秘。どんな言葉で目の前のこの桜を表す事ができるだろう。

いや、きっと、できないんだ。

この景色は今は私だけのものなんだ。

そしてこの景色を、彼と共に—

桜の強い輝きのせいか、頭がくらくらしてくる。

—そして、私は遂に見た。

黒く染まった桜の花弁が、ひらひらと散っていくのを。

黒？

途端にめまいがした。先程から頭を揺らされる感覚に襲われている。

体調が悪くなってきたのかな・・・

意識が薄れて、いくのが、わかる・・・

次に意識が気づかせたのは、自分が倒れているという事。

はは・・・これじゃ・・・ハヤトさんに怒られちゃうな・・・

ハヤトさんと一緒に、見たかった・・・な・・・

そんな事を考えた後には、もう暗闇しかなかった。

その後の事だ。

アオイチ中に桜木の湖で人が亡くなったという噂が流れた。

—それが俺の知る彼女の事だとは思ひもしなかったが。

聞けば、以前一緒に旅をした事がある、あの三兄弟が彼女を発見したのだという。

医術に詳しい黒月の忍者、白影によれば、

元々病弱な身体で妖力を最も溜め込んでいる千年桜に近づいたために

その妖力に耐えきれなかったのではないかとの事だ。

どうして、桜木の湖に・・・

悔しくて、悔しくて、たまらなかった。

またあの夜空の下で、一緒に花見ができると思っていたのに。

—あれを見せたのは他ならぬ俺自身ではないか？

あの時出会っていなければ、こんな事には・・・

既に温かさの残っていない彼女を目の前にすると、自然と拳に力が入り震え出す。

悲哀、後悔、そして涙もでない程の絶望。

全部だ。

全部が今俺を支配している。

このままで良い訳が無い・・・！

このまま後悔の波に飲まれるくらいなら、やるべき事がある筈だ。

この子の想いを踏みにじった元凶、隼。

俺は武士として、お主らのくだらぬ企みなど全て、全てこの手で壊してやろう。

今は亡きハルナの顔を撫で別れを告げた後、黒月城へと向かった。

「決心は固まったかの。ハヤトよ」

玄武討伐の依頼をされた時と同じく、客間に俺と黒月姫、そして月影がいた。

「黒月姫」

俺は片膝をつき、顔を伏せる。

「武士ハヤトの名に於いて、拙者はこの玄武討伐の間、姫に忠誠を尽くす事を誓おう」

「よくぞ申してくれた。それでこそ父・・・黒月当主に仕えた武士じゃ」

黒月姫は安心したように腰を下ろすと、俺もその場に座る。

「死人が出た今、市民が不安を抱き始めるのも時間の問題でござる」

月影も焦っているようだった。

「うぬ。事は急務となった。直ぐにでも戦力を集め、討伐に向かう」

遂に始まるのだ。アオイチの存亡をかけた戦いが。

黒影が俺の影に現れたのはその数日後だった。

黒月城へ招集がかかると、そこにはシゲオや月影がいたが

黒月姫の側には、紫色の髪にこの辺りでは珍しい着物を着た者が座っていた。

新しい側近だろうか。

残念ながら俺には性別の区別がつかないし、忍者かどうかもわからないが、まだ若い。

「普段は姿を現さないのだが、今のうちに紹介しておこう」

黒月姫がその者の肩をぽんと叩くが、動じない。

「此奴はテング。無口な奴ゆえに無礼に見えると思うが、実力は桁外れじゃ。宜しく頼む」

どうやらテングはかなりの信頼を得ているようだ。それならばこちらとしても心強い。

そして顔合わせが終わったところで、黒月姫が話を始める。

戦力は黒月忍者の精鋭が約二百人。月影を中心に各自連携をとり、そこに俺、シゲオ、テング、黒月姫が加わるといったところだ。

玄武の討伐と言うのは今までに例の無い事である。

しかしこれで万全の対策には間違いないのだろう。

一通り話が終わると、一行はアルカディアへ向かうのだった。

さすがの理想郷は、自然に満ち溢れている。

—はずだった。

考えてみれば当然、アオイチまで妖力が及ぶという事はこのアルカディアにも影響は出る。

草木は枯れ果て、道中で生き物は一匹も見かけなかった。

このまま妖力を浴び続ければ、かつての荒廃状態に戻るのも時間の問題だろう。

かなりの距離を進むと、ここがアルカディアの奥地である証拠

玄武が潜むと言われる玄武洞へ辿り着いた。

「既に凄まじい妖力を感じるな」

シゲオが真剣な目つきで言う。

「しかし、我らの命に代えても、隼の計画は確実に潰すでござるよ」

月影は後方の部隊を見てそう言うと、玄武洞の方に向き直った。

もうここに命を懸けていない者はいないだろう。

「者ども、覚悟を決めここまで着いてきてくれた以上

命を落とすな、などとわらわは申す事はできぬ」

黒月姫は一呼吸入れると、声を張り上げた。

「黒月の誇りにかけて、全力で戦うのじゃ！」

「ゆけ！」

黒月姫が叫ぶと同時に、数百の忍者が一斉にその場から消えた。

「俺たちも行くぞ！」

残った者に声をかけると、俺は玄武洞の中へと走った。

この先に報われる未来はあるのだろうか。

そんな思いを、抱えながら。

「グアアアアア！」

玄武は暴走していた。

がむしゃらに、何かから逃れたいかのような怒号をあげている。

忍者が玄武の元へ到達すると、その暴走は更に激しくなった。

前足を地面に叩きつければ、地面が割れ土槍となり、

大木のような尾を振るえば、突風をも起こし、

そして、燃え盛る火炎を吐く。

歴然の差とはまさにこの事なのか。

俺達が着いた頃には忍者達の陣形はあっさりと崩され、防戦一方になっていた。

「テング！」

「・・・」

黒月姫が叫ぶと、テングは瞬時に玄武の前まで到達した。

そしてその場で印を結び、その力を一気に解き放つ。

「暴風術！」

テングが掌底のように両手を突き出すと、衝撃波が玄武を襲う。

「わらわ達も続くぞ！」

黒月姫は桜のような桃色の弓を構え、弦に矢をあてがう。

この弓は黒月一族に代々伝わる宝弓、アルジュナ。

本人を通して矢に魔力を与える事ができる魔弓でもある。

「不死鳳凰の矢！」

矢に炎が付与され、それを放つと炎が翼のように広がり一直線に敵を捉える。

続け様に黒月姫はもう一本の矢をあてがった。

「雷翼獣王の矢！」

今度は矢だけでなく弓にも電気がほとばしる程の魔力で、それを放つ。

光速の矢は先方の矢に追いつき、二本同時に玄武に直撃した。

我ながら驚きだった。

この二人の息はピタリと合っており、その連携は見事なものである。

しかし、それもこの目の前の四聖獣には無力に等しかった。

二つの攻撃が直撃してもなお変わらず暴れ続けている。

「ハヤト」

シゲオが俺に目配せする。

「応」

答えると同時に、駆け出した。

俺のこの刀では山のような甲羅を斬る事はできまい。

そう考えていると、シゲオが玄武の下へ潜り込んだのか、そこから雄叫びが聞こえた。

「うおおおお！！」

玄武の腹部に、一撃。その強靱な肉体と拳は山を浮かせる程だった。

前足と後足が地から離れ無防備になる。

—ならば！

その隙を逃すわけがない。

玄武の右横に瞬時に移動し、一気に前に跳躍する。

「そこっ！」

渾身の力で玄武の右前足を斬りつけ、着地。

更に跳躍し左前足にも斬りつけた。

「ガアアアア！」

何とかダメージは与えたようだが、それでもやはり目に見えるような傷はつかない。

向き直り刀を構えようとしたところで見たのは、玄武が腹部から着地する瞬間だった。

「不味い—シゲオ！！」

地震かと思うほどの、震動。

「まさか・・・」

「何が、まさかだって？」

後方から聞き慣れた声が耳に入ってくる。

シゲオだった。

その隣には、額から血を流しボロボロになった月影が居た。

「助かったぞ、黒月の忍者」

どうやら月影がシゲオの回収に間に合ったらしい。

「すまぬ、ハヤト殿、シゲオ殿。忍軍はほぼ壊滅でござる」

数百もの黒月の精鋭が短時間で崩された。

この桁違いの戦力差の前に、敗北するのか。

ふと側に風が吹いたかと思うと、黒月姫を抱えたテングが現れた。

「こうなれば、もう一斉攻撃しかあるまい」

黒月姫もこの最悪の自体に焦っているようだった。

前戦していたテングの身体も、傷だらけになっていたのだから無理もない。

敵は四聖獣の一角、蛇に巻き付かれた亀の玄武。

—亀、か。

「無茶かもしれないが、拙者に良い考えがある」

文字通りの一斉攻撃にして、全員の連携。

ある提案をそこに居る者達に伝えたと、玄武の前足が降りかかってきたのを合図に各自散開した。

俺のもう一本の刀、こいつが全ての鍵だ。

テングは黒月姫を玄武の攻撃範囲外に連れていくと、また直ぐに玄武に向かう。

「テング、あれを使って良いぞ」

「・・・」

何も言わずにその場から消えると、玄武の首下あたりに到達する。

着物の袖から扇子を取り出しているのが見えた。

と同時に、辺り一帯に突風が巻き起こり、それがテングに向かっていく。

その扇子は、風を纏う。

「スパイラルストーム！！」

その場で体を何回転もさせると、その場に巨大な竜巻が起こった。

玄武の頭部は竜巻に押し上げられ、前足ごと、浮いた。

瞬時にシゲオが玄武の前に立つと、目を閉じ集中する。

「ハァァ・・・！」

そのまま首元のあたりに突撃し、拳を構えた。

「幻影烈雷拳！！」

先程の一撃とは変わって、閃光が走る程の素早い連撃。

シゲオが降下しながら連撃を繰り返し着地したところで

間髪いれず後方からの攻撃が玄武を襲う。

「インフィニティダンス！！」

アルジュナは光り輝き、そこから光の矢を生成する事で連射が可能となる。

次々と放たれる矢は全て腹部に命中した。

「グオオオオ・・・」

絶え間なく与えられる攻撃は確実に玄武にダメージを与えていた。

既に前足は上を向き、後足で立っている状態だ。

「シゲオ！あと一撃だ！」

「任せろ！」

シゲオは再度跳躍すると、左手を前に突き出し右手を腰のあたりまで引く。

「千変万化！神力絶対！如意神秘！不動不滅！無双類進！展五の...」

その拳に全力を込め、一気に突き出した。

「白鷗式っ！！！」

玄武に加えられたダメージが衝撃波として視える程の威力。

そして、またも地を揺るがす震動が起こった。

それは玄武が前足を叩きつけるものとは比べ物にならない程大きいもの。

山が一ひっくり返ったのだ。

亀の甲羅で最も柔らかい場所があらわになる。

一瞬で決めねばなるまい。

俺は腰にかけてあったもう一本の刀に手を添え、跳躍しながら一気に引き抜いた。

その白く輝く刀身は剣先に向かうにつれて細くなっている。

妖刀・貫鬼(つらぬき)。この刀は本来の斬るべき役割を持たない。

幾つもの鬼を突き刺し妖力の宿ったといわれる、貫きの刀。

俺は刀を構え、目を閉じ精神を集中させる。

—まさかここで、あの龍京の剣聖に教わった技を使うとはな。

空を、蹴った。

「 — 閃！！」

着地した時には、刀は亀を貫いていた。

閃光の如く高速で落下した刀は、山の甲羅をも破ったのだ。

「ガァァァァァ！！」

玄武が巨大な咆哮を上げるとその体が光を発し始める。

—不味い、このままでは飲み込まれる！

貫鬼を引き抜くと同時に、隣に人の影が現れた。

次の瞬間には、俺は黒月姫の前に立っていた。シゲオもテングも、無事である。

「・・・助かったぞ、月影」

「負傷した拙者にはこれくらいの事しかできぬ故」

月影は苦しそうな顔をしながら、必死に笑みを作っていた。

「見ろ！玄武が・・・」

光を発し始めた玄武が間も無く光に包まれると、その姿が収縮していく。

そして、掌に収まるのではないかと思うほどの小さな黒い球体になっていた。

あれは・・・ハードストーンだろうか？

その正体を確認した瞬間に、白い装束の忍者が現れた。

黒月の白影はここにはいない。

ではあれは・・・隼！

その白い装束の忍者は球体を持ち去ろうとする。

「おい、待て！」

一瞬の出来事を前にこんな言葉しか出す事ができなかった。

忍者は既に消えていた。

玄武の消失により、妖力の供給は止まった。

だが、桜に宿った妖力は未だに残ったままである。

まだこれではアオイチの一時的な安全が確保されたに過ぎない。

黒月と隼はこれからも対立を続けるだろう。

俺達はあの後アオイチに戻り、しばらくは玄武の再出現に備えて警戒体制をとる事となった。

—後になってわかった事だが、隼の今回の行動にはアガシュラが関係しているという。

事はもはやアオイチだけに収まらないのかもしれない。

—桜を見に行った。

黒い桜の花弁が散る事はなくなったが、この千年桜の周りには未だに幽霊が彷徨っている。

街の者はこの幽霊を幽霊桜と名付けたらしい。

しかし千年桜を下から眺めると、やはり言葉では言い表せない景色が目に入ってくる。

この景色を、とうとう一緒に見る事はできなかったんだな。

このまま喪失感に満たされたくはないと、街へ戻ろうと振り返った。

その時。

—ハルナ？

振り返った先に、居たような気がした。

濃藍色の長い髪に、金色の瞳をもった—幽霊桜。

それはこちらをじっと見つめている。

「お主は、ハルナなのか？」

幽霊桜が返答する筈もないが、思わず話しかけてしまう。

(やっと会えた・・・)

「また一緒にこの桜を見たいとずっと思っていた」

(はい。私もです)

「俺はお主を守りたかったと、今でも後悔している。すまなかった」

(いいえ、私がハヤトさんの忠告を受け入れなかったのが悪いんです)

独り言を淡々と続けるように、今まで溜めていた言葉を全て吐き出す。

「俺は、その・・・お主の事が、好きだった」

(・・・はい。私もです)

もう、目の前をはっきり見る事はできない。

目の前に居るのが幽霊桜なのか、ハルナなのかもわからない。

わかるのは、涙によって目の前の景色が全て淡く彩られているという事。

止め処なく溢れる、涙。

「俺は、俺はっ・・・」

ふと、それが近寄ってくるのを感じた。

(でも今、こうして一緒に千年桜を見る事ができているじゃないですか)

もう一度千年桜を見上げた。ハルナとこの景色を共有しているようだ。

「約束をしましょう」

「！？」

声が聞こえた。

しかし、ここに居る人間は俺ただ一人。

「出来るならもう一度、この千年桜の下で会いましょう」

「ハル・・・ナ？」

「また貴方と、あの時のような夜空の下で、花見がしたいんです」

「・・・わかった。約束しよう。俺は必ず、またここに来る」

その言葉を聞くと、側に居た影は安心したようにずっと千年桜の方へ消えていった。

「あ・・・あ・・・」

「ハルナあああああ！！」

再会

満開の桜の中を歩いていると、思い出したくない記憶も引き摺りだされるらしい。

約束は—そうだったな。

俺は街中で立ち止まり、空を見上げていた。

すると、一人の冒険者が話しかけてきた。

「あなたがハヤトさん？カズノさんからあなたの話を聞いて来ました」

「ん・・・その羅針盤はカズノ殿の。・・・いかなる用で拙者の元へ？」

カズノ殿とは古くからの仲であり、その所有物を持つという事は信頼の証になる。

「黒月姫様にお会いしたいのです。どうすれば良いでしょうか？」

「姫様に会いたい、か。カズノ殿は拙者がまだ黒月に仕えていると考えたのだろうな」

「しかし、今は浪人の身分なのだ。せめて黒月城の内部について教えて差し上げよう」

ふと、良い事を思い付いた。

「それを教える代わりに、一つ拙者の頼みを聞いてはくれぬか」

「はい・・・？何でしょう」

「桜木の湖の奥に、千年桜という大きな桜がある」

—約束を、果たそう。

「その千年桜に、伝えるだけでよいのだ」

『今夜、花見をしよう。とな』